



日台稲門会

NEWS LETTER 第8号

平成 17 年(2005 年) 民国 94 年

8月1日 発行

発行 日台稲門会事務局

編集 白鳥・石川・小野間・齋藤

まだまだ残暑が続いていますが、お盆を故郷でお過ごしになった方もいらっしゃることでしょう。皆さんの第二の故郷、台湾の記事満載の、日台稲門会ニュースレターをお届けします。

会長報告

1) 早稲田大学台湾研究所 第4回運営委員会報告

(4月9日(土) 10:00~12:00 早稲田・リーガロイヤルホテル)

出席者は、羅福全委員長、許世楷委員、ト() + 余) 照彦委員、北村友雄委員、李世昌委員、西川潤所長、石田浩委員(若林正文委員退任に伴い新任、関西大学教授・台湾学会理事長)、白井克彦早大総長、小口彦太早大理事、白鳥和夫委員、江正殷委員(事務局)。

議題は先ず進行中の事業報告に続いて、次の新規事業が提案・承認されました。学部学生向け「台湾を知る」通年科目の設置、若手研究者博士論文作成支援プログラムと候補者選定、「戦前期日本における台湾、日本関係年表 - 1895~1945」プロジェクト、「WTO・FTAの東アジア経済へのインパクト」、日台学生交流支援、「台湾映画と日本」シンポジウム、台湾映画上映会

また、羅委員長から台湾で準備中のシンポジウム(2005年台日国際学術シンポジウム「日本における台湾研究」)の開催の提案があり、これに台湾研究所が参加することになりました。日時2005年10月29日、30日、場所台北、会場未定、主催者 早稲田大学台湾研究所、中京大学、関西大学、協賛 亜東関係協会、交流協会台北事務所、台湾側出席予定者 台湾で日文を講義している大学の研究グループ及び日本の台湾研究と関係のある学者約100人。

運営委員会終了後、ほとんどの皆様は当日15:00から行なわれた日台稲門会第九回定期総会にご出席いただきました。

2) 高玉樹先生の告別式に参列

(7月11日(月) 台北市・私立第二殯儀館)

早稲田大学台湾校友会名誉会長の高玉樹先生(早大名誉博士、総統府資政、元台北市長、元交通部長)が、6月15日逝去されました。享年93。故人のご冥福を謹んで心からお祈り申し上げます。

台北市長時代に、現在の台北の広々とした道路区画を導入した功績は今も台北人の語り草となっていますが、交通部長時代には、日台断交後の日台航空路線再開に台湾側の交渉当事者としてご尽力いただきました。

7月11日に台北で行われました告別式には、当会よりお花を献花、私も会を代表して参列してまいりましたが、早稲田大学からは奥島前総長、西本副総長、井上総長室秘書課長、江先生、台湾校友会と台北稲門会からは両会長以下大勢の皆様が参列され

ました。また、陳水扁総統、呂秀蓮副総統、謝長廷行政院長を始め、ほとんどの閣僚が参列されました。



1) 第九回 日台稲門会定期総会・第六回 日台稲門交流の集い 盛大に開催される

(4月9日(土) 15:00~ 総会及び記念講演会: 日本記者クラブ・大ホール、日台交流の集い: レストラン・アラスカ)

4月9日午後3時より日本プレスセンタービルにて開催。

第一部の定期総会では、前年度の事業報告、決算報告、会計監査報告、今年度の事業計画、予算案、会長選任、新役員の承認など7つの議案が審議されたが、全て原案通り決議された。なお、会長は白鳥和夫氏が留任、退任幹事に代わり3名の新幹事が選任された。

第二部の特別講演会では、許世楷台北駐日経済文化代表処代表が『台湾の当面する政治課題について』と題して、台湾と日本の関係に焦点をあて、代表の熱い心のうちを肅々と語られた。中共の「反国家分裂法」採択直後でもあり、講演終了時には激励の大きな拍手が会場内に響き渡った。

第三部の日台稲門交流の集いでは、白鳥会長の開会挨拶に続き、羅福全亜東関係協会会長、白井克彦早稲田大学総長、西川潤早稲田大学台湾研究所所長、徐重任早稲田大学台湾校友会副会長、北村友雄台北稲門会会長の来賓挨拶と祝辞をいただいた。

次いで早稲田大学125周年記念事業募金として白井総長に寄付金の目録が贈呈され、許代表の発声による乾杯のあと開宴となった。各テーブルで親しく交歓が続くなか、神田・丸山両幹事の司会で、地区稲門会代表、台湾校友会幹事、留学生、海洋冒険家山本良行さん、

キャスターの生島ヒロシさん、そのほか会員・校友が次々登壇し、軽妙なスピーチを披露した。ハイライトは、新入会友の留学生スヴェトラナさんのポニージャックスの西脇久夫さんのピアノ演奏に合わせての歌であった。プロ並みの歌唱力とムードとで会場を沸かせた。

終宴が近づき現役生・熊谷陽介君の若々しく、きびきびしたリードのもとに早稲田大学校歌を全員で斉唱し、上野晃司幹事の国宝級的な中締めの後、加藤博副会長の挨拶をもって閉会。来賓・留学生・会員・会友・校友など82名が出席する大盛会であった。(事務局 小野間恒夫記)



歓談する白井総長と許代表

2) 講演会及び台湾人シェフの作る料理を楽しむ会(懇親会) 開催される

(6月24日(金) 「羽衣」銀座本店)

第一部の講演会は、「日本人32万人の台湾引き上げ開始から終了まで」と題し、日本台湾学会理事・河原功先生を講師にお迎えし開催されました。敗戦による日本人の台湾引揚げの実情について興味深い秘話も交え、素人にも解かるよう噛み砕き、また資料を駆使して午後5時より約1時間、懇切丁寧にお話しがありました。終了後、自らも引揚げの経験がある会員からの発言も飛び出し、一同感慨に耽ったひとときを過ごしました。(講演会要旨は別欄をご覧ください)

講演会終了後、いよいよ第二部開始。上野幹事ご推奨の台湾人シェフ王さんの心づくしの料理の数々を、河原先生も交え参加者一同で大いに味わいました。また懇親会終了後も追加の紹興酒を楽しみ、至福の時を過ごしたことを報告します。

参考までに当日の採単をご報告申し上げます。

前菜(前菜盛合せ) 包子(羽衣湯包子) 牡蠣油焼鮮貝(活ホタテ オイスター炒) 鳳目鮮蝦(塩蛋入りエビの揚げ) 開洋炒青菜(青菜炒め) 五柳枝連魚(連魚のきのこあん添え) 珠米純苦瓜湯(苦瓜のむしスープ) <サービス> [苦瓜の身のから揚げ]、肉粽、<デザート> 2種 寿桃、マンゴープリン



白鳥会長の挨拶



前菜(前菜盛合せ)



包子(羽衣湯包子)



牡蠣油焼鮮貝



鳳目鮮蝦



開洋炒青菜(青菜炒め)



五柳枝連魚



珠米純苦瓜湯



マンゴープリン

台湾NEWS

台湾で活躍中の日台稲門会特別特派員の羽原記者からのお便りです。

『健康談義』

2000年法律研究科修士 羽原美紀

日台稲門会の諸先輩方、ご無沙汰しております。皆さまに送り出していただき台湾に参りましたが、毎日があっという間に過ぎ、間もなく1年近くになるうとは、本当に信じられないような気持ちです。またこちらでも台北稲門会に参加させていただいていますが、仕事でも、お客様や日本からの出張の方々とお話しをしてみると早稲田ということが判明し、話が弾むということが度々ありました。日本を離れてみて、より自分には早稲田という出発点があり、帰る場所があることの有難さを感じています。

さて、今まで元気に過ごしておりましたが、先日突然朝から背中が痛く、疲労困憊という症状に見舞われました。同僚や友人に話したところ、西洋医学では説明できない症状である「中暑」ではないかとのことでした。(主な症状としては、汗をかかないか冷や汗をかく、全身の疲労無気力感、極度の眠気、食欲不振、頭痛、身体の痛み、吐き気など)結局クーラーの部屋でよく休み、同僚のススメで漢方薬を飲みはじめ、体調管理に努めたところ、今はすっかり良くなりました。

中暑は「暑気あたり」と訳せばよいのでしょうか。太陽の下にいた場合にかかる熱射病のようなものだと思っていましたが、それ以外にも、クーラーと暑

い所を頻繁に出入りする場合にもかかってしまうようです。回復するためには、涼しいところで休むほか、椰子のジュースや、青草茶等が「火の気を下げる」効果があり、中暑に効くそうです。さらに症状がひどい場合は背中や首を板や小銭で擦る「刮」や、真空の透明のカップで背中を吸う「拔缶(カップング)」等の方法で「気を通す」のだそうです(身体の中の悪い熱気を追い出すという感覚でしょうか)。こちらでは、他にも「身体が冷える食べ物」であるとか(スイカ等は感覚的に理解できますが、みかんも冷える食べ物に該当するので、風邪をひいたらみかんはそのまま食べてはいけないのですが、焼けば食べてもよいそうです)日本では聞いたことがない健康の概念がたくさんあるので、台湾の方に教えていただきながら、アドバイスをおとなしく聞いて異国での毎日を過ごしています。

台湾も昔と比べ、早くから暑くなりはじめ、気温も格段に高くなっているようですが、ニュースを見る限り、日本もとても暑いようですね。日本の皆さまもどうぞ自愛下さいませ。また台湾にお出かけになる際は、くれぐれもお気をつけて!それではまた、再見!

会員コラム

麗しき、師弟合作コラムを紹介します。めざせ「明日のジョー」ならぬ「明日の徐君」です。

『日本で留学している私』

徐睿宏

私は徐睿宏と申します。台湾で生まれ、19歳の男の子です。小学校を卒業してあと、カナダに住んでいました。高校が終わったら、すぐ日本にきました。現在、早稲田大学国際教養学部の学生であり、早稲田大学体育局ボクシング部の部員です。

日本に来た理由はいろいろあります。簡単に言えば、早稲田大学で勉強をしたいです。そして日本の言葉や文化を理解するために、日本へ留学しに来ました。私はカナダで教育を受けたけれども、台湾で生まれ、台湾人の親に育てられた台湾の子です。早稲田大学はいつも私の心の中に憧れている大学ですから、地元の大学へ行かなくて、早稲田大学へ進学しました。もちろん、日本に来ることで、他にも沢山の良い点があります。しかし、日本の言語や文化を理解したい理由は、社会人になる時のためです。将来、沢山の機会を作るために、いろんな言語や異文化、環境を接することが必要からです。それによって、自分の視野も広くなり、適応性も強くなります。

日本に来たばかりの時は非常に大変でした。食事はどこでも高いし、量も少ないし、言語も自由に使えなかったです。さらにホームシックになり、いろんな要素で気を落していました。外国にいることを忘れるために、スポーツをやりたくくなりました。高校時代に野球をやっていたので、大学にも続けたいと思いました。しかし、早稲田にある野球部活やサ

ークルの練習場は全部学校から距離が離れるので入れません。ですから、野球以外の興味を持つボクシングを始めました。

ボクシングを始めた時は本当に難しかったです。言葉や日本の人間関係が良く分からないからです。例えば、先輩、後輩の関係がうまくいけないし、ほかの日本人の部員とのコミュニケーションもあまりできなかったです。特に後輩と先輩やOB達との関係が慣れられなかったです。カナダでバイト先の上司でも話す時には平等で接していたが、部活での厳しい上下関係が信じられなかったです。しかし、時間が経って、日本の人間関係や文化にも慣れてきました。今は部活の先輩と同年生も友達になりました。最近、OB達が良い指導をくださったことに気づきました。加藤先輩だけではなく、他のOB達にもお世話になりました。私はボクシング部に入れたことは非常に幸運なことだと思っています。そこで日本の文化や生活だけではなく、たくさんの人に出会えたり、いい経験をしたり、いろんな知識も学びました。今の私は、ただ部活だけではなく、日常生活も楽しくなりました。これから、もっと沢山のことを習いながら、色んな経験を積みたいと思います。そうすると、世話をしてくれた人々や、両親、兄の期待に応え、成功で、幸福な人になれると思います。

留学生ボクサー・徐君がニュースレターに投稿したことを知り、私も少し補足したくなり書かせて頂くことにしました

昭和36年理工学部卒 加藤 博

後輩の徐君と初めて会ったのは、今年の4月のことです。黒板に書かれていた新入部員の名前の中に「徐」君の名前を見つけた私は、「徐君は台湾の人？中国の人？」とボクシング部の美人マネージャー（本当に美人です）に聞いてみました。そして、徐君が台湾から来た留学生であることを知ったのです。

私は20年間台湾に駐在しており、1994年3月には早大ボクシング部を台湾に招待し、台湾オリンピック村、草屯の海軍基地に合宿させ、全海軍代表と試合を組みました。また2002年8月には、

台北市立百齡高校（この高校は元プロボクシング日本フライ級チャンピオン、ロッキー林さんがコーチをしているため、私も台湾へ出張の折には必ず練習を覗き、交流を深めている学校です）を日本に招き、東京都高校ボクシング代表チームと試合を組む等、日台のボクシングの交流に微力ながら務めて参りました。そんな私にとって、台湾出身の徐君が早大ボクシング部に入ってくれたということだけで、とても嬉しかったのです。

その時徐君から、ボクシングは早大に入ってから始

めたこと、だから今は毎日が基礎練習の繰り返しだということを知りました。それから、私も徐君への指導を喜んで引き受けました。

ところが、忙しくしばらく練習に参加できなかった私が1ヶ月ぶりに指導に行くと、どこを探しても徐君の姿が見当たりません。「練習がきつくてついていけなくなったんだな」私は少し寂しく思いながら、マネージャーに確認しました。「徐君は辞めてしまったんだね」するとマネージャーは「先輩、何をおっしゃっているんですか。徐君ならあそこにいるじゃないですか！」彼女が指差す方を見て、私は驚きました。

リングの片隅でシャドーボクシングをする、すっかりボクシングに慣れた様子の徐君がそこにいたからです。その後、パンチングミットを受けたりなどしたのですが、彼のボクシングのセンスはなかなかのもので、私は思わず傍らにいた女子マネージャーにこう言っていました。「徐君は良い選手になるね」するとマネージャーは即答しました。「はい、あのイケメンの徐君、本当に上達が早いです！」と。

そんな徐君が先日、私に会うなり目を輝かせながらこうやってきたのです。「先輩1月に早慶戦があるんですよ。その時、選手として出ることはできないでしょうが、前座試合のエキシビジョンマッチに、僕はどうしても出たいのです！」

そして彼は、この夏休み皆が休んでいる間に練習をして強くなりたい、そのためにも8月から台湾に一時帰国する際、台湾で練習するジムがあれば是非紹介して下さいと言いました。そこで私は先にも書きました百齡高校の練習場を彼に紹介することにしたのです。

「どうもありがとうございます。毎日練習に通い、絶対に強くなって秋の早慶戦に出られるように頑張ります！」と力強く徐君は言ってくれました。

本当に頼もしい台湾出身ボクサーが誕生しました。来年にはレギュラーとなり、関東大学リーグ戦に出て活躍して欲しいものです。

日台稲門会事務局でも、こんな熱意あるボクサー徐君を是非応援して頂きたいです。徐君の益々なる活躍に心から期待しております。頑張れ、加油、徐君！

会員動向

1) 訃報

当会幹事・鈴木幸夫氏（昭和26年・政治経済学部卒）が、去る平成17年3月24日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2) 平成17年入会の方々のご紹介（6/30現在）

宮本 孝さん（昭和47年政治経済学部卒 フリージャーナリスト） 桑山淑恵さん（旧姓楊さん 昭和63年文学部卒 通訳 魚津市在住） スヴェトラナ・ヴァシリュークさん（法政大学大学院博士課程2年 会友） 新田浩司さん（昭和38年政治経済学部卒） 守屋寧夫さん（昭和35年商学部卒 世田谷稲門会にも所属） 黒田正信さん（昭和49年理工学部卒 清水建設） 越谷重友さん（昭和37年法学部卒（財）社会経済生産性本部） 西脇久夫さん（昭和33年商学部卒 ポニージャックス） 大嶋 武さん（昭和40年第一文学部国史卒）、 村上克男さん（昭和45年理工学部電気通信学科卒 今年台湾より帰国）、以上10名の方々が新規に入会されました。

3) 石川幹事長がブログを公開しました

当会幹事長石川公弘氏が齢70にしてブログに挑戦、遂に公開しました。会員の皆さま、是非ご覧下さい。
<http://blogs.yahoo.co.jp/kim123hi/ro/>

母校NEWS

2005年ホームカミングデーは10月23日(日)開催(2005稲門祭も同日開催)

同日は、法学部ホームカミングデー・商学部ホームカミングデーも開催されます

<http://www.waseda.jp/alumni/tomonsai/index.htm>

*特別企画：

【講演会要約】台湾からの引揚げ - 開始から終了まで 『留台日僑会報告書（留台日報）』を中心として

講師 河原 功 先生（日本台湾学会理事）

（講師略歴）昭和23年東京生まれ。成蹊大学大学院修士課程終了、現職は成蹊高等学校教諭、日本台湾学会理事。研究課題は台湾文学、台湾史。主な著書 専書『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』（1997 研文出版）、共著『台湾霧社蜂起事件 研究と資料』（戴国輝編著 1981 社会思想社）、『よみがえる台湾文学』（藤井省三・下村作次郎等編 1995 東方書店）、『台湾文学研究の現在』（台湾文学論集刊行委員会編 1999 緑蔭書房）、『台湾の「大東亜」戦争』（藤井省三・垂水千恵等編 2002 東京大学出版会）、『講座台湾文学』（山口守・藤井省三・河原功・垂水千恵著 2003 国書刊行会） 編集・解説『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集』全6巻（共著 1998 緑蔭書房）、『日本統治期台湾文学 台湾文学集成』全20巻（共著 2002～緑蔭書房） 監修・解説『台湾日誌』（編集復刻版 1992 緑蔭書房）『台湾引揚・留用記録』全10巻（編集復刻版 1997～ゆまに書房）『日本植民地文学精選集』全14巻（2000～ゆまに書房）

1945年8月の敗戦時、海外には660万人もの日本人（軍人300万、一般邦人300余万）がいた。そのうち台湾からは48万人近く（軍人16万、一般邦人32万）が日本に引揚げた。厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』（厚生省、1977年）には、台

湾からの引揚げはなんの問題がなかったような記述がされているが、台湾協会所蔵の『留台日僑会報告書』に目を通すと、台湾からの引揚げもまた生易しいものではなかったことがわかる。

a . 第一次遷送

台湾からの大規模な引揚げは、1946年2月21日から4月29日に行われた。投入された船舶は延212隻（そのほとんどはアメリカからの貸与艦）その甲斐あって、短期間で台湾に住む日本人約28万人（軍人・軍属の家族8,208人、遺族・留守家族59,941人、一般日本人215,956人）が台湾を引揚げた。この時期の在台日本人の台湾引揚げを「第一次遷送」という。

ところで、これで日本人全員が台湾を離れたわけではなかった。台湾にはまだ、戦後台湾の復興（主として技術継承）のために中華民国政府に留用された日本人（中華民国側の呼称は「留用日僑」）7,174人とその家族20,438人の、合計27,612人が残っ

ていた。留用者は、電力、糖業、鉄鋼、農林、水産、鉄道、港湾、教育、研究、専売、衛生等の各分野にわたっていた。それだけ多くの日本人が台湾にいたわけなので、日本人子弟のための学校教員や、「葬祭等の宗教儀式的執行」のための僧侶及び牧師も留用者に加えられていた。

「留用日僑」に対して、「残余日僑」と呼ぶ日本人もまだ台湾に残っていた。留用解除になった者、帰国を拒んだ潜伏者、密航者、台湾人と結婚したが離縁して帰国を求めている日本人、服役中の犯罪者、戦犯容疑者、施設に保護されている孤児、療養所に残された高齢者、結核・癩・精神病等の患者、などであった。

b . 沖縄籍民

更に、同じ日本人でありながら、「琉僑」と呼ばれる沖縄籍民もいた。敗戦によって沖縄がアメリカ管理下となったため、中華民国の管理外に置かれた沖縄籍民は、人数も約1万人とそんなに多くないこともあって、台湾では微妙な立場に置かれた。特に各部隊にいた沖

縄出身の兵士たちは、敗戦後すぐに別組織され、市街の清掃事業に従事し、日本人引揚げの「第一次遷送」時には、集中営（岸壁に仮設された倉庫）の建設、引揚げ者の荷物運搬等にあたり、日本人遷送の後回しにされた。日本人引揚げを蔭で支えていたのである。

c . 第二次遷送

「第二次還送」は同年10月から12月の間に行われた。船は延9隻が投入され、18,585人(留用解除となった本人及び家族16,997人、残余日僑1,588人)が帰国した。引き続き中華民国政府に留用された「留用日僑」は、まだ4,560人(本人及び家族)もいた。

この「第二次還送」にあたっては、アメリカは自国の輸送艦を引揚船として中華民国に提供することはしなかった。だが、国共内戦中の中華民国政府には、日本人のために引揚船を用意する余裕はなかった。そんななか、中華民国政府は、やっと引揚船として貨客船「台南号」(前身は日本の船「鳥羽丸」)を調達することができた。ところが「台南号」の客室は353人分しかない。にもかかわらず、「3,000人乗船させよ」というむちゃな指令が出る。乗船4日前になって減員が認められたが、実はこの「台南号」には、二晩徹夜作業で砂糖6,000トンが積み込まれていた。引揚げ者を減員した分、砂糖が多く積み込まれたわけである。しかし、この大量の砂糖は日本国民のためのものではなく、物資の欠乏していた中国大陆への移送品であっ

d . 第三次還送

第二次還送で日本人の大多数は帰国したが、1947年2月現在、留用日本人919人、その家族2,403人、合計3,322人が台湾にいた。1947年2月の闇タバコ販売に端を発した「二二八事件」が勃発したことで、日本人の留用解除が一気に進んで、日本人はすべて帰国させられることとなった。

ところで、多数の台湾人死傷者を出した「二二八事件」の中に、一人の日本人犠牲者がいた。その名は木村俊夫(25歳)といい、台湾省日僑管理委員会の留用職員11名のうちで最年少であった。彼は「二二八

e . 最後の引揚げ

それでもまだ台湾には留用された日本人がいた。彼らは少しずつ台湾を離れていった。ところが、1949年6月中旬に予定されていた最後の「還送」がいつまでたっても具体化しない。外務省宛の要請の手紙が台湾側で故意に握り潰されていたからだ。私的ルートで「還送」の準備がすでに台湾で整っているのを知った日本政府は、直ちに帆船「日本丸」を派遣、8月9日に引揚者239人(留用者とその家族175名、それに台湾人と離婚した女性とその子女、密航者や潜伏者)を乗船させることができた。一行が佐世保に到着したのは8月14日だった。これが政府レベルによる、台湾からの最後の引揚げとなった。このとき活躍した「日本丸」はいま、横浜に繋留されており、観光名所

た。「台南号」は、佐世保港で引揚者を下船させるとすぐ、中国大陆に向かい、積んできた6,000トンの砂糖は上海に荷揚げされた。「台南号」を再び中国大陆から台湾に回送するにあたっては、今度は台湾で必要とする物資(例えば肥料としての硫酸)を積み込んだり、台湾に戻る台湾人等を乗船させたようである。このように、「台南号」は、単に台湾-日本間の日本人引揚げの専用船として使用されたのではなく、むしろ台湾=中国間の物資輸送等でこそ有効利用されていたのである。

「台南号」だけに頼って引揚げの進捗がはかばかしくないことを知った日本政府は応援の船6隻(病院船「橘丸」も投入)を出すことになった。結局、中華民国政府による還送は3隻のみ、人数では三分の一の6,000人弱であった。

沖縄籍民の還送も一方で実施され、9,928人の沖縄籍民が「帰国」した。アメリカ管理下にある沖縄籍民の引揚げには、アメリカ軍のLST艦2隻が投入された。

事件」が勃発した翌日、台北市在留日本人に対して発せられた「離宅禁止令」の伝達中に災禍に巻き込まれたのであった。その死には不明な点が多いが、木村俊夫の死に対して葬儀費用及び弔慰金として20万台湾元(1元=1円)が遺族に支払われることとなった。当時日本人の引揚げ者に許された持参金は1,000元までであったから、台湾省行政長官公署としても、精いっぱい配慮をしたと評価できよう。

となっている。留用日本人はいなくなったはずなのに、それでも少数の日本人が留用継続されていた。台湾大学の高坂知武、磯永吉、松本巍などである。貢献度が極めて高かったのであろう。農学院の農業機械系の建物は、高坂知武の遺徳を後世に伝えるために「知武館」と命名された。1957年になって帰国した磯永吉には、多年にわたる台湾における蓬莱米育成の業績に対して終生毎年1,200キ口の蓬莱白米が中華民国政府より送られることとなった。

このように、日本人の台湾引揚げにはさまざまな事実が秘められていた。

会合予告

1) 日台稲門会説明会「最近の台湾観光事情」(台湾観光協会様をお招きして)及び暑気払い

日時：平成17年8月31日(水)
講演会 17:00~18:00 暑気払い 18:00~20:00
場所：金美齡事務所内 日台交流サロン
住所 東京都新宿区新宿1-3-12-801 新宿1丁目三番館8階
電話 03-5367-5011

2) 早稲田大学台湾校友会総会

日時：平成17年11月26日(土)
場所：台北市

その他

1) 台湾関連書籍紹介

「明治の冒険科学者たち~新天地・台湾にかけた夢」 柳本通彦著 新潮新書刊 上野幹事推薦図書です。
著者紹介：1953(昭和28)年京都市生まれ。ノンフィクション作家。アジアプレス台北代表。著書に「台湾・霧社に生きる」「台湾革命」など。映像作品に、「私は日本のために戦った」など。

2) 台湾研究所行事予定

台湾映画祭 日時：11月2日(水)9:30~17:30(午前：シンポジウム 午後：映画上映会) 場所：大隈小講堂(仮) 共催：東京国際映画祭、交流協会、台湾資料センター
*参加費は無料です

編集後記

古の名選手「青バット」の天下弘はもともと神戸の出身だったが、母親の仕事の都合で台湾にわたり高雄商業で本格的に野球を始めた。その後明治大学で野球を続け、終戦は陸軍少尉として埼玉で迎えたため彼自身は引揚げ者ではなかったが、母親と再会するのは昭和21年5月のことだったという。河原先生の講演にあった、いわゆる「第一次還送」の時であろう。台湾に限らず、当時外地で営為を送られた諸先輩の引揚げ話をうかがうとわが国民は、海外資産を総て接收され、焼け跡のそれこそ無一物からよくぞ国連常任理事国入りを窺うまでの地位を築き上げたものだと思う。日本人はもっと自信をもたなければいけないと、団塊の世代の、そのまたうしろの世代は痛感する。

さて、お知らせ。6月に開催した講演会はお陰さまで盛況でした。切っ掛けは、諸先輩の、「日台稲門会は定期総会と暑気払い・忘年会だけの会ではなかったはず」という優しい叱咤と、幹事の「こんなことでは期待して入会してくださいったかたちも呆れて退会してしまうんじゃないですか」という至極ご尤もな指摘を受け、取り敢えず文化事業と食道楽との二本立てで企画したのが始まり。担当幹事の巾広い人脈と奥深い博識の支援のもと、役員一丸の我愛台湾の底力を見せることができたと自画自賛しております。

というわけで、会員・会友の皆さまにお願い。これからの「会員相互の親睦」と「台湾との交流」を眼目に置いた企画につき是非ご提案をお願いします。直ぐに実行可能かどうかは別として、今後の行事の参考にしたいと思います。

受付先は次の通りです。よろしくお願ひ申し上げます。

事務局長 小野間恒夫

住所：〒253-0061 神奈川県茅ヶ崎市南湖5 15 5

電話・ファックス：0467-83-2611 メール：sigma.tno@jcom.home.ne.jp